

「その他の関係」あるいは新たな「擬制的親子関係」へ

— 家族の再構築そして高齢者介護へ向けての試論 —

天沼 香

はじめに

本稿は、拙著『日本史小百科〈近代〉— 家族』(1997年、東京堂出版)、拙稿「近現代日本における父子関係」(『東海女子大学紀要』第17号、1998年3月) および拙稿「『父親』・『父権』・『父性』の復権論の系譜— その批判的検討 —」(『東海女子大学紀要』第18号、1999年3月) の続編として位置付けられるものである。

本稿も、前稿に引き続き、「父親という存在の社会的なありようを、歴史的、構造的に明らかにする」ことも目的としている。が、とともに稀薄化する家族関係を補完する意味において、今後重要性を増してくるであろう他者間の関係にも言及したいと考えている。

こうした趣旨に基いて、本稿では、個別的、具体的な個々の家族における父子関係およびそれを補完する他者間の関係について、収集した事例を報告しようと考えている。

私が提唱するところの「ファザグラフィー」(fathergraphy—父親誌)、「父子関係誌」さらには「その他の関係誌」そして「擬制的親子関係誌」の開示である。

ひとつの民族の社会文化のありようを、「パーティシパント・オブザベーション」(participant observation—参与観察)等の手法を用いて、構造的に把握して「エスノグラフィー」(ethnography—民族誌)を作成し、それをもとに諸々の分析や統合を展開し

て、民族学、文化人類学、社会人類学が構築されていったのと同様なことを、「父親」、「父子関係」そして他者間の関係にも適用してみようという試みといえよう。

これは、かつて私が、現代文明社会を歴史人類学的な視座からみようとする場合に、有効性を発揮するのではないかと考えて提唱した「ペルソナグラフィー」(personagraphy)記述という手法に通じるものでもある⁽¹⁾。

私は目下、この「ファザグラフィー」の記述、収集を進めているところだが、そうしたなかで、実の「父子関係」(もちろん「母子関係」も)ではけっしてないにもかかわらず、それに近いようなかたちで発現している他者間の関係性を少なからず見出すことができた。

そこで、ここでは、まず、実の「親」絡みで発現した「親子関係的関係」のいくつかを、具体的に取り上げることとする。それは私が前稿で、今後の宿題としておいた、現代的な「擬制的親子関係」の構築に関する問題とも関連し、又、鶴見俊輔、浜田普、徳永進といった人びとが、これからの家族のありようを考えるうえで重視する所謂「その他の関係」とも深く関連してくる事柄だからである。

1. 「その他の関係」

鶴見俊輔は、『思想の科学』に投稿してきた女性の文中の「その他の関係」という文

言を、これからの「家族」を考えていくうえでのキーワードのひとつとして重視している⁽²⁾。

その女性（以下、Kさんと称）の語る「その他の関係」とは大凡、次の通りである。—Kさんにはお祖母さんがいる。そのお祖母さんをKさんは好きだ。お祖母さんは、身の回りの世話をしてくれる中年女性と楽しく暮らしている。その中年女性は身内の人ではない。彼女には身寄りがない。お祖母さんに万が一のことが起きたときには、彼女はお祖母さんの家から退散しなければならない。何故なら彼女は、お祖母さんとは縁戚関係も何もない「その他の関係」だから。けれども実はお祖母さんにとっては、身内の誰よりもその中年女性との「その他の関係」が大切なのだ。Kさんは、孫であり、お祖母さんとは法的にも近い関係にある存在だが、自分よりも「その他の関係」の中年女性のほうが、祖母にとって重要な人間関係であることを認識する。そしてKさんは思う。こうした大切な「その他の関係」をもっと大事にできないものだろうか。—⁽³⁾

このKさんの文章を受けて、鶴見は「たしかに、『その他の関係』が家族のなかに入り込んでいて、それが家族のもっともいきいきとした部分を既に構成している」が、「最終段階になると、それを法律、制度によって切り捨てて平気のように、法律上のつながりのある家族は思ってしまった」。が、「そのズレがいまの問題」⁽⁴⁾であると指摘する。

こうした問題に関連して、私は拙稿『「父親」・「父権」・「父性」の復権論の系譜』のなかで、次のようなことを述べている。

「…今日、あまねく人間関係の希薄化が喧伝されているなかで、家族内人間関係もその例外ではありえない…。であるがゆえに（私は）、新しい父子関係、母子関係の構築の必要性を唱えるものである。とともに私は、それを周辺から支持する社会的装置として、かつて民俗社会において重要にして有効な機能を果たしてきた『擬制的親子関係』を、新しく現代的に再構築して活用する方途を考えてい

る」⁽⁵⁾。

Kさんや鶴見と私とは、視座は異なるものの、問題関心が収斂していくところは限りなく近似している。稀薄化する家族内人間関係（身内同士の関係）を、補完するものとして、時にはそれを凌駕する濃い人間関係として、それぞれ「擬制的親子関係」あるいは「その他の関係」を措定し、その重要性を訴え、そうした「関係」の介在を通して崩壊の一途を辿る家族の再構築をはかること、家族という人間関係を見直すことを目指すという点において両者は、ほぼ一致しているのである。

この私の提唱する新たな「擬制的親子関係」ないしは鶴見俊輔の提唱する「その他の関係」は、一般的に稀薄化する一途の現代における人間関係を再構築するひとつの縁となる可能性をも秘めている。

とともに、Kさんの実体験のように、これからより一層、進行する高齢社会に向けて、高齢者や障害者の介護（わけても在宅介護）のありかたにも、これらは資するに違いない。

かつての民俗社会における名付け親、烏帽子親、鏑付け親、仲人親等々の「擬制的親」の存在は、「擬制的子」およびその実の親（わけても父親）にとって、自らの現在そして将来の社会的立場を有利にしてくれるものだった。すなわち「擬制的親子関係」における「親」は、民俗社会において有力者でなければならず、「子」の世渡りを庇護しうる存在でなければならなかったのだ。

逆に、「擬制的子」のほうは、その「親」に対して、生涯を通じて何らかのかたちで、その庇護に対する返礼として奉仕を続け、義理を欠くことのないように努めた。

こうした「子」の存在を有することによって、「擬制的親」のほうも自らの社会的勢威を保持、拡大することができた。

このように、民俗社会における「擬制的親子関係」には、相互の利害関係が密接に絡み合っていたし、その社会における両者の身分的上下関係、力関係も明瞭だったのである。

いうまでもなく、私の提唱する新たな現代

における「擬制的親子関係」は、そうした利害関係、身分的上下関係、力関係等とは無縁でなければならない。鶴見俊輔のいう「その他の関係」も又、然りといえよう。

敢えていうならば、それらにおける人間関係の基調を成すのは、それを形成する人間同士、「ウマが合う」「ソリが合う」「波長が合う」「気が合う」ことといえる。ただ、それだけのことではない「何か」が付加されなければ、現代的「擬制的親子関係」や「その他の関係」への移行は認めにくい、まず人間的に「ウマが合う」…等の相互関係が生じなければ、それらの関係の発生は考えられない。

本稿では、こうした「ウマが合う」…等の相互関係に「何か」が付加されたために成立したこうした関係の実例のいくつかを提示しておこう。こうした事例を多数、集積し、その後、それらを分析的に検討し、類型化をはかることにより、現代的「擬制的親子関係」、「その他の関係」構築に関する明解な回答が得られるのではないかと考えるからである。

2. 「介護」を媒介とした「擬制的親子関係」

高齢者介護の現場において、私の考えるところの新たな「擬制的親子関係」あるいは、鶴見俊輔がKさんの投稿を受けて提唱する「その他の関係」が重要性を増している。

「関係」の始まりは、単に在宅介護に呻吟する家族からの依頼で、家政婦協会等から派遣されたホームヘルパーと要介護者という「関係」であったり、何らかのかたちのボランティアと要介護者という「関係」であったりすることが多い。

訪問看護婦、同看護師、保健婦と要介護者という「関係」のこともある。すなわち、「関係」の始まりにおいては、きわめてオフィシャルな、しかも「介護する側」と「介護される側」という優劣のはっきりした関係性が横たわっていることが多いのである。

ところが、そうした「関係」のなかで接触の回数を重ねているうちに、両者の間には「す

る側」「される側」という立場を超えた、仕事抜きの親近感をもった関係性が生じてくることが多々ある。いうまでもなく生身の人間同士の「関係」であるから、いくら接触の回数を重ねても、一向にラポールが確立されないこともある。

この親近感あるいはラポールを確立しうるか、しえないかの拠って来るところこそ、先に述べた「ウマが合う」か合わないか、「波長が合う」か合わないかであるといえよう。

そうして、「ウマが合」い、「波長が合」ったときには、「介護する側」と「される側」とは、年齢や互いの立場を超えて親交を結び、遂にはそこに現代的な「擬制的親子関係」あるいは「その他の関係」が形成されるのである。

高齢者介護の場合、当然のことながら「介護される側」のほうが、「介護する側」よりも年長であることが多い。ところが、実年齢の上下にもかかわらず、この場合には、「介護される側」が「子ども」の立場になって、「介護する側」を「親」としてみようような事例が多い。一般的に庇護する側、保護する側が「親」であり、庇護される側、保護される側が「子ども」であってみれば、これは当然のことともいえよう。

「介護する側」も、それこそ「親身」の介護をしているうちに、「介護される側」の人に身内の人に対するような親しみを覚え、その人の何がしかが不如意である分だけ、「親」が「子」を世話し、面倒をみるようにして接する。

しかし、それとともに「介護する側」が、「される側」との接触を重ねているうちに、その人格や年輪に感動し、その人に対して徐々に実の「親」のような気持を抱くようになることもある。

さる有償ボランティアのホームヘルプサービスに参加している64歳の女性Nさんは、金曜と日曜を除く毎日5時間（午前11時から午後4時まで）、自宅内での転倒がもとで寝たきりになってしまった89歳の女性Yさんの介護をしている。清掃、清拭、排泄介助、食事作

り等、かなり広範なホームヘルプサービスである。

こうした日々の接触のなかで、Nさんは、(教えられることが多いので、Yさんのことを)「最近、自分の母とまちがってしまうんです。勉強させてもらっています」といった感懷を抱くようになる。⁽⁶⁾ Yさんが、Nさんに寄せる信頼感と親愛の情は、「子」の「親」に対するような、でもあり、「親」の「子」に対するような、でもある。

この「介護される側」のYさんと、「介護する側」のNさんとの間に生じたような関係性は、けっして珍しいものではない。私もある関わりをもっていた77歳の要介護男性Z氏と、その介護を依頼され、Z氏の家庭に派遣されてきていたホームヘルパーの59歳の女性HAさんとの間にもこうしたラポールが確立していたので、その状況に関して、やや詳しく触れておこう。

在宅介護中のZ氏は、HAさんの来訪とともに、顔の表情を柔らげ、彼女に足をさすってもらおうと心地良げに体を預けていた。Z氏の家の人たちが食事の介助をしようとすると、箸やスプーンを跳ねのけるのに、HAさんが「はいZさん、お食事にしましょうね。おいしいですよ」というと、素直に口を開けて、食べ始める。

減多に口を開かなくなってしまったのに、彼女が「Zさん、歌を聞かせてくださいな」というと、静かに穏やかに昔をいとおしむかのように「兎追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川、夢は今も巡りて、忘れ難き故郷…」と歌い出す。

他の諸々のヘルパーの人びとはおろか、家の人たちでもZ氏のおムツ交換は難儀を極めるのに、HAさんだと、割合に抵抗なく交換してもらおう。Z氏の家の人たちは、常々「ZとHAさんは相性がいいのかもしれない」といつていた。確かにその通りだった。

HAさんが、誠実な人で、東北の人らしく粘り強く、にこやかにZ氏に接していたせいもある。彼女が、万事テキパキとこなしてい

たせいもある。しかし、それだけではない。「何か」が、Z氏と彼女の間にはあったのだ。単に要介護者とヘルパーという、してもら側の人と職業人としての介護者という間柄だけではない「何か」が介在していた。

それは、Kさんや鶴見がいうところの「その他の関係」にも介在していた両者間のものすごい信頼感と親近感だったのではないだろうか。Kさんのお祖母さんは、身の回りの世話をしてくれる身寄りのない中年女性と暮らしていた。2人は身内でも何でもなかったが、強い絆で結ばれていた。Kさんのお祖母さんにとっては、最も欠けがえのない人だった。しかし、民法上、2人は「その他の関係」でしかない。先にも触れたように、これをもっと大切にできないものだろうかKさんは問うたのである。

こうした意味での「その他の関係」が、Z氏とHAさんとの間にも成立していたのである。この場合、Z氏は「息子」であり、HAさんが「母親」だった。HAさんに安心して身を委ねているZ氏を見ていると、それは信頼し切って母親の胸に抱かれている幼児のようにもみえた。

正常な思考回路を失なったZ氏は、何がしかHAさんに自らの母親の姿をダブらせていたに違いない。

Z氏は、自分の母親をこよなく愛していた。忙しい現役の仕事人の時代にも、寸暇を見つけては、九州は博多の実家へ飛んで帰り、母親の側で何日間かを過ごすことを無上の喜びとしていたような人だった。

その実家でのZ氏は、普段の日常性のなかのZ氏とは全く違っていた。母親に甘えきっていた。ひととき、厳しい現実の世界から逃れて、清浄で甘美な母と子の世界に浸り切っていたようだった。Z氏は、その母親の前ではこのうえなくにこやかで朗らかで素直で「いい子」だった。これは、Z氏の母親が70代の時も、80代の時も、90代の時も、100の大台に乗った後も変わらなかった。

67歳の時に母親を亡くしたZ氏は、それか

ら10年余の後、病める自らの前に現れたHAさんに自らの母の姿をみたのかもしれない。日だまりでHAさんに調子を合わせて歌う時の表情、足をさすってもらっている時の表情、HAさんに押してもらって車椅子で散歩している時の表情等々、HAさんとともにいる時のZ氏の安心し切った満足気な表情は、博多に帰省して、自らの母親の傍に居る時のZ氏の表情と殆ど変わるところがなかった。

HAさんの前での、柔和で素直で「いい子」で良くいうことを聞くZ氏をみていると、確かに、Z氏＝「息子」、HAさん＝「母親」的な関係が発生していることを感じないではいられなかった。

病み、苦しむZ氏にとって、どんな医療的なケアよりも、このHAさんとの清浄な安らぎの時こそが大切だったのかもしれない。体も口も不如意になってしまったZ氏にとって、うまく自分の意思を察知してくれて、然り気なくケアしてくれるHAさんとの交情は、もしかしたら、最重要の人間関係になっていたのかもしれない。

しかも両者の交情は、けっして片務的、一方的なものではなかった。HAさんのほうも時にZ氏を実の父親のように感じるがあった。今日の自分はZ氏に支えられている、Z氏という存在によって生きがいを感じていられるといった認識を、HAさんはいつしか抱いていたのである。

これは、「介護」を介して形成された、現代的な新たな「擬制的親子関係」ということができよう。

3. 単なる義理の父子関係からより濃密な「擬制的親子関係」へ

Qは、フランス中世史を専門とする歴史学者だ。諸般の事情により、勤務先の大学の所在地は中京圏ながら、自宅は京都にある。まあ少なくとも学者や研究者といった類の職種の間は、遠距離通勤を日常茶飯事としているから、彼の場合もそう珍しいことではない。

教育に関しては、大学の地元での活動が中

心になることは言うまでもない。が、研究面での活動ということになると、研究者仲間との情報交換、資史料の検索等々の便宜性からいって京都に地盤を置いていたほうが有利なのである。

そんなわけで、Qは、月曜日には京阪神の諸々の研究機関で研究に没頭し、その足で新幹線に飛び乗って、名古屋市郊外のI市の大学宿舎に向かう。週日をそこでの教育活動その他に費やし、金曜日の深夜、京都の自宅に舞い戻る。土・日曜は、京阪神のどこかで開催される研究会等に出席して、研究者としての鋭気を養う。あるいは、家族とゆったりと過ごす。そうして月曜からは又、先の繰返しというのが、Qの基本的な生活パターンだった。

Qの京都在住には、もうひとつ大きな理由がある。彼の連れ合いのS子さんが、同市と関わりの深い地域プランナーという職をもつ女性だからだ。結婚後も、共に働き、共に家事を分担する、子どもが生まれた暁には共に主体的に子育てに参画するという契約に近い約束を交わして結婚したQとS子さんだった。

だから、京都の大学院を出て、Qが中京圏に職を得たから、即、京都を離れるということはできなかったという事情があった。結局、時間的により融通の効くQが遠距離通勤をする、S子さんの職場の近くに住むという結論に達した彼らは、京都での生活を継続することになったのだった。

ごく最近、彼らが京都在住を継続せざるをえない事情がさらに二つ重なった。S子さんの父親が病を得て入院後、時を経ずに末期の肺ガンと判明、その1ヵ月後には60歳を少々越えたばかりの若さで亡くなってしまったのだ。そのショックも手伝って、S子さんの母親も持病を悪化させ、入院加療したものの、50代の働き盛りにもかかわらず、とうとう寝たきりになってしまった。

5人姉妹の次女のS子さんは、もともと「気は優しくて力持ち、一家に一台ならぬ1人、必需品のS子さん」と皆からうたわれていた働き者で、結婚前は実家の働き頭だった。元

来、病弱な父親の代りに一家の父親役を務めていた程のしっかり者だった。妹たちを一人立ちさせるのにも彼女の実力や人脈が大いに与っていた。

だからS子さんの内なる「父親的なもの」「父親性」には、妹たちも周囲の人間も一目も二目も置いていた。妹たちは感謝もしていた。

私は、S子さんのような存在を知るに及んで、本当の父親以外の人物が、家庭内において「父親的な存在」としての役割を果たすことがあることを思い知らされた。

それまでは、そうしたことは、母子家庭において、母親が父親役も兼ねるとか、長兄が父親的な役割を演じるといったケースとしては認識していたけれども、その域は越えられなかったのだ。が、S子さんのような存在を知ったことで、現実の父親の不在・実在にかかわらず、家庭内で「父親的な存在」感を発揮する人材が登場することがありうることを私は確認したのだった。

これは、私にとって、「家族関係」「親子関係」を考察するうえで極めて重要な事実だった。

家庭内において、何らかの事情で母親が不在だった場合、家族成員の誰かが代わって「母親的な存在」感を示すことは限りなく不可能に近いことなのだ。もちろん、男中心社会に好都合な男女役割分業という名の性差別に基づく「母親的な存在」として、誰かが家事全般を受け持つといったことは、事の是非は別として、十分に可能である。

しかし、どう考えても、母親に代わる誰かが「母親的なもの」「母親性」を発揮して、「母親的な存在」感を示すことは殆ど不可能なのだ。これは「産む性」にもとづくものに違いない。母親の子宮の内に一定期間、宿っていたという一体感にもとづくものに相違ない。母親は、余人をもっては代え難い存在なのだ。

対して、S子さんではないが、父親に代わる存在として、圧倒的な「父親的な存在」感は、

それを余人が示しうるのである。この違いは、父親と母親との決定的な相違といえよう。とするなら、昨今、「存在の耐えられない軽さ」

(The Unbearable Lightness of Being) ではないが、存在感の希薄さを嘆く父親が増大しているのは、当り前のことが当り前に起こっているだけのことに過ぎないといえる。

近代以降、家庭内においては存在感の薄い父親というシェーマは、歴史的必然を伴っていた。それを戦前までの日本では曲げて、法や社会規範によって、父権を強化し、家庭内における父親の権威・権力を保護していただけのことなのだ。だから、戦後、この父権に関する法や社会規範による庇護がなくなるとともに、父親の存在感が減殺されてくるのは、当然すぎるほど当然のことなのである。

それにしても、父親のもつ「父性」となると、これは家族の余人をもって発揮し難いのではないか、ということこれまたそうとはいいい切れない。「母性」が自然であり、「父性」が文化であると仮定するなら、文化は学習によって他者が習得し、伝えることができるものなのであるから。

話を元に戻そう。S子さんの父親が亡くなり、母親が寝たきりになってしまってから程なく、今度はQの父親が倒れてしまった。旅先のK市の宿で、夜中にトイレに立って転倒、脳挫傷、硬膜下血腫を起こし、そのまま同市の病院に入院してしまったのだ。

連絡を受けた朝は、Qの勤務する大学の入試の当日で、Qはその業務のためにまさに京都の家を出て、大阪の地方入試会場へ向かおうとしていた矢先だった。大急ぎで大学に連絡を取り、代替要員の派遣を依頼したQは、とるものもとあえず、近所に住む母親のT子さんともどもK市に急行した。

K市への車中、「危篤」の二文字がQの頭から離れなかった。時折、それが「死」という一文字に置換されそうになるのを、Qは必死に振り払っていた。T子さんも同様の思いらしく、普段は冗舌な母子が、「夫」を「父」を憂えて寡黙なままだった。

自宅を出てから、病院に辿り着くまでの4時間半の間、Qは父親のことだけを思い続けた。幼い頃の父親との思い出が断片的に蘇ってくるのを、Qは必死になって打ち消し続けていた。多分、その幻影が父の死の前兆のように思われたからだろう。

それでも父親以外のことは考えられなかった。Qが現在のような職を選んだのは、明らかに父親の影響だった。Qの父親のT氏も大学の研究者だった。しかし、専攻はQとは全く畑違いの最先端の科学技術分野だった。が、文学や歴史にも造詣の深かったT氏は、幼い頃のQに夜な夜な寝ものがたりで、古今東西の文学や歴史を語ってくれた。

ごく最初のころは、桃太郎や金太郎や浦島太郎といった日本の定版、イソップやグリム童話といった西洋の定版だった。それが徐々に、平清盛、重盛、知盛、源義朝、悪源太義平、頼朝、義経、木曾義仲、上杉謙信、武田信玄、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、高杉晋作、坂本龍馬、勝海舟、シーザー、ブルータス、アントニウス、ダリウス1世、ルイ14世、ダントン、マラー、ロベスピエール等々の人物の登場する歴史物語へと移行していった。

歎進帳の弁慶と富樫政親との丁丁発止のやりとりや、鉢の木、佐野源左衛門常世と北条時頼のやりとりなどを臨場感溢れる語り口で語ってくれたりもした。かと思えば、デカルト、カント、ショーペルハウエル、ヘーゲル、マルクス、西田幾太郎、田辺元らの哲学について幼児向けに語ってくれた。

Qは物心がつき始めた頃の父の寝物語の数々を今でもはっきり覚えている。その父親が異郷の地で生死の合い間を彷徨っているという冷厳な事実を信じたくない気持の強さに、Qは自らと父親との絆の深さを思い知らされたという。

考えてみれば、幼いころに父親の寝物語を聞いていなければ、歴史や哲学への関心も芽生えず、ましてやフランス中世史を専門とする歴史家なんぞにはなっていなかったかもし

れない。そんなことを思いながら、Qは自らの内的世界における父親の圧倒的な影響を、この期に及んで初めて、かみしめていた。

Qが、小学校3年生の時に彼の父母は、毎月『日本の歴史』を1巻ずつ買ってくれた。彼は寝るのも忘れて、それをむさぼり読んだ。1年でそれが完結すると、両親は今度は、毎月『世界の歴史』を1巻ずつ購入してくれた。彼は遊ぶのも忘れて読み続け、読み返した。

あまり何度も読み返したので、両シリーズの全巻の細々とした記述までが、Qの脳裏に刻み込まれてしまった。この小学3、4、5年生の時の体験が、今にして思えば現在のQの全生活の礎になっていたのだ。

幼い頃の父親との思い出が浮かんでくるのを躍起になって、かき消そうとしていたQだったが、次から次へともみあげてくるのは、父の懐かしい語り口と父への感謝の念ばかりだった。車中のQは、懸命に否定しながらも、心の片隅では「父の死」を覚悟していたのかもしれない。

その思いも同じだったのか、普段は快活なQの母親のT子さんも、「夫の死」を覚悟しているかのように、殆ど押し黙ったままだった。

もどかしい時が流れ、漸く列車はK市駅に到着した。当り前の時間がかかったただけなのに、QとT子さんには異様に長い車中の時間だった。駅から僅か車で15分のK病院までの行程もたどたどしかった。

彼らがT氏の居場所をK病院の受付で尋ねて6階へ上がると、エレベーターの出口のところにT氏の妹のR子さんが待ち構えていて「早く、早く、早く」と叫んでいた。QとT子さんは、「まだ生きていてくれた」とだけ思って集中治療室に急いだ。Qの父は、意識は混濁ながら息はしていた。早速、主治医との面談が始まった。「生死の可能性は五分五分」と申し渡された。

たとえ一命は取り止めても、頭を強打して頭蓋骨を骨折しており、ひどい硬膜下血腫を併発しているので、後遺症が残る可能性は高く、寝たきりになってしまう危険性も非常に

高いとも宣告された。

その日から約1ヵ月間、QとT子さんは、R子さんやS子さんの助けを借りながら、必死にT氏を看護した。S子さんは、京都での激務とまだ幼いU君の育児と重病にあえぐ実母の看護当番の合い間をぬってK氏のK病院を訪れ、へとへとになっているQになりかわって、T氏を四夜連続徹夜で看護するといった離れ技までやってのけた。

実父を亡くしたばかりの彼女、かつて実家で「父親的な存在」としての役回りを演じていた彼女は、岳父のT氏にそれこそ「父親的な存在」感を感じ取り、限らない親近感を抱いていたからこそだった。

実際、自らも工学部出身のS子さんは、文科系の夫Qとよりも、同じく工学部出の義父T氏とのほうが波長が合うことが多々あった。T氏とは、思考回路が類似しているな、と感じることもよくあった。単刀直入なもの言い方をする点、もって回ったもの言いが下手な点、好き嫌いがはっきりしている点、黒白を明確にしないと気が済まない点、合理的思考に徹している点、人情の機微やちょっとした他者への気くばりに欠ける点、それでいて意外なほどに涙もろい点などなど、S子さんは義父のT氏と自分との似通った性向をいくらかでも挙げることもできた。

その思いは、元気なころのT氏も同じだった。自らの実子たるQは、性格的には控え目で、思慮深く、優しい男で、母親似だった。それだけに、T氏はQがS子さんと結婚した後には、彼女との語らいを楽しみにしていたふしがある。

そうしたなかで、S子さんはT氏から、その「父親的なもの」から、いつの間にか多くのものを学んでいた。その第一は、複線的思考といったものだった。先に触れたように、T氏は工科系の人間ながら、歴史、文学、哲学にも造詣が深かった。そのこと自体が人間性との関わりのなかで貴重に思えた。が、それ以上に、そのことが仕事に反映していることがすごい、とS子さんは思った。

T氏の科学技術の構想のなかには常に深く人間存在が介在していたのだ。ともすれば、人間存在そのものとはかけ離れたところで、科学技術が語られることが少なくないのに、T氏は常に人間存在と密着させて、もっというなら個々の人びとの幸福と常に結びつけて科学技術の発展を論じていた。

S子さんにとって、T氏は「父親的な存在」であるとともに、文化、文明や政治についても語らえるエンジニアであり科学者だった。それが有難かったS子さんは、何とかT氏に再起してもらい、ふたたび彼と科学技術と人間、地域、文明等を語りたいとの願いを込めて、看護に務めたのだった。

Qも、その1ヵ月間、文字通り寄り添って父親の看病に専念するなかで、生まれて始めて、父という存在を静かに眺めることができた。彼は、幼少年期の自らと父親との関係性に思いを至した。

自分が幼いころの父というともまずは厳しく躰けられたことを思い出す。殊に挨拶とセキやクシャミにうるさかった。「お早うございます」「お帰りなさい」「いただきます」「ありがとうございます」等の挨拶言葉がきちんと見えることは人間としての第一歩だ、とやかましかった。

「動物同士でも出会ったときには、きちんとした挨拶をするが、これは『私はあなたを攻撃しませんよ』という互いに安心感を交換するためだ。まして人間同士、きちんと挨拶を交わすことは人間関係の基本だ。挨拶もろくに出来ない奴にろくな奴はいない」というのが、Qの父T氏の持論だった。

だから、他人とちゃんと挨拶を交わせるようにするためには、まず身近かな家族に対して挨拶ができなければだめだ。それこそ「親しき仲にも礼儀あり」が大切、と、幼い頃、QはT氏から痛いほど聞かされたという。

挨拶ひとつとっても、なぜそれが必要かという根拠をこんこんと聞かされた覚えが鮮明に甦ってきた。「やっぱり親父は根っからの科学者だったんだな」と、Qは目の前のベッドに

意識不明のまま横たわる父に微苦笑を向けた。

T氏の父S氏、すなわちQにとっての父方の祖父にQは会ったことがない。が、Qは祖母や父からよくS氏の話を知っていたので、その人となりは彷彿と脳裏に浮かべることができた。祖母や父そして叔母R子さんらから、異口同音に知っていたのは、挨拶にうるさい人ということだった。6人兄妹の末娘だったR子さんなど、朝から大変だった。顔を洗って、服装を整えて、いざ食事の席に就く前に、居間の入口にきちんと正座して、「お父さん、お早うございます。お母さん、お早うございます。兄ちゃん、お早うございます。Cちゃん、お早うございます。Tちゃん、お早うございます。Fちゃん、お早うございます。Aちゃん、お早うございます。ツルや、お早う」と父母に始まり、5人の兄、女中さんに挨拶を済まなければならなかったからだ。

ヨコザならぬ定位置に、背をしゃんと伸ばして正座したS氏は、子どもたちから挨拶を受けると、にっこりとほほえみながら、しかし威儀を正して「お早う」と応答していたという。一日の始めとしてのケジメがここにはあったんだな、悪くはないなとQは、その知らざる光景を思い浮かべてみた。

それにしても、こうした凜とした朝のひとときの雰囲気は悪くないなと、Qの話聞きながら、私も清しい一家庭の朝の光景を想像したことだった。

このS氏の躰を、ものの見事にT氏も受け継いでいた。

セキ、クシャミをするときには、必ず手かハンカチできちんと口を被うように、というのも幼児のQが父親から口やかましく言われたことだった。もちろん注釈付きだった。「クシャミは、空気を伝わって2メートルは飛ぶ。すなわち、蓋をしないでクシャミをすると、前方2メートル離れた人にまで風邪のウィルスうつすことになる。他の人にそういう迷惑をかけてはいけない」というものだった。

幼なごろにも、ただ、ああしろ、こうし

てはいけないだけでは納得できないところを、こうして理由をきちんと説明されると得心がいった、とQは言う。彼は、集中治療室で、躰もいかにも学者的だった父の寝顔を見直していた。

T氏は職業柄もあって、金銭には実に執着のない人ようだった。経済にうとい、といった方が当てはまるかもしれない、とQはいう。その分、T氏の妻、Qの母Tさんは苦労させられた面もある。ともかく清廉潔白を絵で描いたような人物だったらしい。それをT氏がQにどうこう言うことはなかったが、その姿勢をQも強く受け継いでいることは、私にもよくわかった。

Qの浮き世離れした金銭に関する恬淡とした態度には、長年の友人の私も度々、驚かされるが、まさしくこれは父親譲り、そして祖父譲りだったのだ。

Qは言う。あと父親の影響という、やはり幼少時の歴史・文学・哲学の寝物語だな、と。この寝物語を通して、彼は色んなことを学んだことを今、実感している。

たまたま現在という、とうとうたる歴史の流れのなかのひとこまに、自らはぽつんと生きているというような、おのれの存在の小ささを知ることの大切さ、個々の人間存在の欠けがえのなさ、所与のものを所与のものとして受けとめず、懷疑することの大切さ、楽しさ。やや抽象的にいうなら、こんなことを幼児向けの寝物語のなかで、父は語ってくれていたんだとQは又、T氏の寝顔を見やった。

挨拶を大切にしたり、こんないいことを教えたりしてくれていながら、時に無愛想だったり、他者を峻拒するような尊大さや自信(過剰さ)をも見せつけていた父を、Qは懐かしさをもって眺めていた。

後日、久々に、Qの家を訪れて、改めてQの父親観を聞いた私は多くを学んだ。T氏をもよく知る私には、T氏とQとの父子関係が大変に好ましくも、ほほえましく思えた。

Qの年齢の割には遅い一粒種のU君に対するQの躰のしかたが、話に聞いた幼い頃のQへ

のT氏の躰にそっくりだったことに良い意味での「家風」の伝統を感じた。

きちんと子どもと向き合い、関わり合うならば、家庭内における父親という存在は決して希薄ではありえない、と私は認識を新たにしていた。持論を微調整する必要を感じていた。

きちんと向き合い、関わり合わなければ稀薄化するのは、父子関係の専売特許ではなく、これは人間関係全般にいえることともいえる。

元来、自らの実家で「父親的な存在」だったS子さんとT氏との間には、看病を媒介として、単なる義理の親子関係を越えたところで、より濃密な「擬制的親子関係」が芽生えてきたのだった。

4. 「事故」を媒介とした「義理」以上の義理の父子関係

Oは、高校の頃からのバイク好きだった。もうナナハンとも長年の付き合いになる。乗り換えたバイクは数知れず。事故も数知れず。命を落としかねないような大きな事故に遭ったこともある。が、バイクは止められない。

学生時代、あの大学闘争の真只中、ピーター・フォンダとデニス・ホッパーがアメリカ大陸を疾駆する。“イージー・ライダー”を見てからというもの、そのバイク好きは、いよいよ病膏盲に入っていた。

Oは、故郷のM市から東京へ出て学生生活を送っていたが、下宿から大学キャンパスへ通うのもバイクなら、彼女とのデートもバイク、故郷へ帰るのもバイクだった。

格好よくバイクに乗りこなすなどというカッコ良さとは全く無縁の私も、Oに誘われて一度だけ、東京からM市までバイクで疾走したことがある。もちろん自前ではなく、Oのバイクの後に乗っけてもらって、である。

偶々、中学時代からモテモテだったOが、この時は、後に乗せるはずの彼女たちが揃って都合が悪かったので、私を誘ってくれたのだった。「やっぱり、R子を後に乗っけてるほ

うが楽しいなあ」だの、「ぎゅっと彼女が後から俺に抱きついてくる時の感触、お前にはわからんだろうな」だのと一方的に聞かされながら。

それでも、中学、高校時代を過ごした町へのバイクの旅は極めて愉快だった。好漢で、歌も抜群にうまいOが、“カントリー・ロード”などを歌いながら、バイクで田園風景のなかを走り抜ける様は、「畜生メ、サマになってやがる」という感じだった。

単なるバイク野郎ではなく、勉強好きでもあったOは、丁度、われわれが受験のころ、大学闘争の煽りで入試中止となったT大に、その翌年に、入学していた。緻密な頭脳の持ち主のOは、弁護士になるべく、司法試験受験のための勉強に励んでいた。

が、なぜか才気溢れる彼にしては、在学中に合格することが適わず、卒業。アルバイトをしながら、受験勉強に勤しむ、という知らせを受けた。

その後、こちらのほうも長らく外国に出てしまったりしていたために、しばし交流が途絶えていた。卒業して2年半くらいの年月が流れた、とある日、Oから久しぶりに電話がかかってきた。

彼は菓子屋のオヤジになっていた。

……

大学を出てからの浪人時代、2年目のある夏の宵、彼は友人の家で痛飲し、自分では仮眠もと、十二分に酔いを醒ましたつもりでバイクに乗って家路を急いでいた。

その途上、狭い道路を走っていた時、より狭い道から、一時停車もせずに大きな自家用車が彼の目の前に飛び出してきた。驚いた彼は、車との衝突を避けるために、急ハンドルを切った。

次の瞬間、相当、飛ばしていた彼のバイクは、左前方の菓子屋のアイスクリーム・ボックスに激突、彼もバイクともども、そのまま横倒しになった。

件の車は、知らん顔で逃げていった。憤慨した彼は、バイクを起こして追跡しようとし

た。が、ふとみると、アイスクリーム・ボックスがかなり露骨に凹んでいる。

幸い自分の体もバイクも大丈夫そうだし、こっちのほうを謝るのが先か、と心得たOは、菓子屋のシャッターをドンドンたたいた。菓子屋の家人たちは、よほど深く寝入っているのか、なかなか出てこない。

それでも、律気な面も持ち合わせているOは、きちんと謝らなければ、とばかりにドンドン、ドンドン、ノックし続けた。

何分かが経過した後、漸く、なかでガサゴソ音がしたと思う間もなく、ちょっとこわそうなおやじが、開いたシャッターの中から姿を現した。

そのおやじは、Oを睨みつけて、

「なんだ一体、こんな朝早くに。まだ饅頭も羊かんもできとらんぞ」。

菓子屋のおやじの剣幕に少々、たじろぎながら、Oは、それでも、

「いや、違うんですよ。実は、僕、このバイクでお宅のアイスクリーム・ボックスにぶつかっちゃって。ほら（と、へこんだあたりを指さしながら）、こんなにへこましてしまったんですよ。申し訳ありません。それで弁償させていただこうと思ひまして…」。

と一気に言った。

おやじの返答は即座だった。

「なんだ。そんなことでわざわざ、グーグー気持ちよく眠っている人間を起こすヤツがあるか。無礼者め。家のなかへはいれ。怪我はないか。大丈夫か」。

意外だった。怒鳴られて当然と思っていたのに。Oは既にこの時点でこのおやじの男気にグッときていた。

いつの間にか、菓子の陳列ケースの向こうには、心配そうに家人たちが寝巻のまま並んでいた。おやじは委細かまわずOに、

「さあ、さっさとはいらんか。骨折とか何か、しとらんだろうな」。

勧められるままに、Oはシャッターの中に足を踏み入れた。立ち尽くしていた3人の女たちのうち、一番の年かさと覚しき女が、

「まあ、どうぞ、どうぞ。今、熱いお茶でも入れますから」

とってくれた。Oは、

「はあ、どうも恐れ入ります。朝早くからどうも済みません」

と素直にその好意を受け、とんでもない件での不意の来訪を詫びた。若いほうの2人の女たちは、サーッと奥へ消えていった。

菓子の陳列ケースの奥の回り廊下に腰かけようとした彼は、

「どうぞ、よろしかったらお上がり下さい。座敷というほどの部屋でもありませんが」

という女の声に促されて、靴を脱いだ。

「座敷というほどでもない部屋」に上がらせてもらった彼は、そこから菓子売り場が見渡せることを知った。ここで家族が団欒しながら、客が菓子を買いに店に入ってきたら、すぐに応待できるんだな、などとOが感心しているところへ、おやじも上がってきて、丸い座卓をはさんで彼の正面にどっかと座った。

「アイスクリームでもどうだ」

「ありがとうございます。いただきます。でも、あのケース、ひどくへこんじゃってるので弁償させていただきたいんですが」

「そんなもん、いらん、いらん。うちは自家製の菓子で勝負しとるんじゃ。既成品のアイスクリームなんか、付け足しの売りもんだから、はっきりいって、販売を止めちまってもいいくらいなもんだから、気にせんでいい」

「本当、済みませんでした。そういっていただいて気が楽になりました。が、やっぱり僕が全面的に悪いのですから、弁償させて下さい」

「弁償だか小便だか知らねえが、しつこいやつだな。いらんといったら、いらんのだ」

「そうはいっても……」

「そうはいってもも、こうはいってももない。もうその話はやめだ。それより、今朝みたいな事故を起こさんように気を付けろ。どうやら今回は怪我もなさそうで良かったが、バイクの事故は命とりになりかねんからな」

どういおうと、こういおうと、このおやじは、Oの申し入れを受けようとはしなかった。

結局、その日、Oは、おやじの出してくれたアイスクリームを食べ、おばさんの出してくれた熱いほうじ茶を飲んで、30分弱、2人と世間話をして、菓子屋を辞した。

翌々日の夕刻遅め、Oは、市内の目抜き通りのIデパートの商品券と菓子折りをもって、件の菓子屋を尋ねた。

ちょうど閉店するところらしかった。おとといの早朝、菓子ケースの向こうに寝巻姿で立っていた若い女のうちの姉らしいほうが、太い針金の棒の曲がった先を、シャッターの下方の小穴に入れて、降ろしていた。

Oは、

「こんばんは」

と声をかけた。若い女は、

「いらっしやいませ」

と答えた。女は、Oのことを同定していないようだった。夏の夕刻にノースリーブの水色のワンピースが涼しげだった。Oは、

「おとといは、どうも済みませんでした」と謝った。一瞬、けげんそうな顔をOに向けた女は、

「あっ、あのおとといの朝の…」

といいながら、警戒を解いて微笑んだ。その清楚な笑顔にOは運命的なものを感じた。自らの来意を自ら取り違えそうになってしまったのを押さえるかのようにしてOは、

「いや、ほんと、おとといの朝は済みませんでした。お父さん、いらっしやいますか」と尋ねた。女は、

「父は奥に居ます。ちょっと待ってくださいね」

といって自分の父親を呼びに行く代わりに

「でも怪我しなくてよかったですね。うちの父も、ほんとうにあいつに怪我がなくて良かった。何となく良さそうなやつだったよなとか言って、お会いできたことを喜んでたみたいですよ」

などと、親しげに話し始めた。

あのおやじばかりでなく、その妻や娘まで、

Oに怒りを向けるどころか、まず彼の身を案じてくれ、鷹揚に接してくれることに、Oは益々、運命的なものを感じ始めていた。

ひとしきり話した後で、漸く忘れかけていたシャッターを降ろす作業を再開しながら、女は、

「どうぞ、お這入りください」

と勧めてくれた。店先で、もう一度、心から謝罪の意を表し、商品券と菓子折りを受け取ってもらって帰るつもりをしていたOは、しかし、もはや戸惑わなかった。それどころか、既に女のシャッター降ろしの作業を手伝ってさえいた。

すっかり作業を終えた女は、Oをともなうて、

「お父さん、Oさんよ」

といい終えるやいな、Oに微笑みかけて言った。

「どうぞ、お上がりください」

間髪を置かず、おやじの声がした。

「おう、又、きたか。何だ、又、何か壊したのか」

減らず口の面白いおやじだなど思いながらOは、

「失礼します」

と勧められるままに、例の店が見渡せる「座敷というほどでもない部屋」に上がりこんだ。なぜか、ものすごく懐かしい気がしたOは、いよいよ運命的なものを感じていた。

「おとといは、どうも大変失礼いたしました」

といいながら、Oは、おずおずと菓子折りの上に商品券をのせて、おやじに手渡そうとした。途端に、おやじの大声がOの頭上に降りかかってきた。

「なんだ、しつこいやつだな。もうその件はしまいだって、おとといもいっただろう。第一、なんだ。菓子屋にくるのに、他所の菓子屋の折りをもってくるとは、なんて気の効かんやつなんだ、全く」。

怒られているようでもあり、ユーモラスでもあり、Oは、おとといに続いて、一層、この

おやじの人柄にひかれていた。女は、

「なによ、お父さん。Oさんが、わざわざご丁寧にきてくださったのに」

と、父親をたしなめるように、しかし顔は笑いながら、おやじとOの間に割り込んできた。明るい照明の下でも、女の笑顔はやはりOに感じさせるものをもっていた。

そこへ、近所の豆腐屋へ、夕飯の味噌汁用と冷奴用の豆腐を買い足しにいていたおやじの妻と下の娘が帰ってきた。いかにも仲良げな家族だった。

M藩八百石取りの由緒正しいOの家ではあったが、Oの父親は、彼が小学3年生の折りに妻子を置いて早世、家は母ひとり子ひとりだった。そのせいか、華やかな風貌とはうらはらに、Oは寂しがりやだった。

Oが、この菓子屋のおやじにひかれ、その家族にひかれ、その娘にひかれていくのには、あたかも「赤い糸」で結ばれたような必然性があったのかもしれない。

おやじの直裁的で屈託のない人柄、男気に感じたOは、この一家とどんどん親しくなり、頻繁に行き来をするようになり、遂には上の娘に求婚するに至ったのだった。

菓子屋のおやじは、

「これこそ、ほんとの『ぶつつけ本番』というやつだな」

と悦に入った表情で、我が娘へのOの求婚を喜んだ。

清楚な微笑をもつ女だけでなく、この菓子屋のおやじをはじめ全員を好きになったOは、とうとうこの菓子屋を継ぐことにした。

ひとりぼっちになってしまう自分の母親のことが気がかりだったが、おやじは、「お前のお袋さんをひとりぼっちにするようなことは絶対にせん。寂しい思いはさせん」といつてくれた。

実際、このおやじは、Oの母親のことを大変に気遣い、しょっちゅう「座敷というほどでもない部屋」に招いて、夕食を共にしてくれたり、彼女のところへ出来たてのほやほやの饅頭を届けてくれたりしている。

もともと甘い和菓子が好物のOの母親も大喜び。いつの日か、最初のころは全くなかったとはいえない「自慢の息子を菓子屋に奪われた」というような意識も薄らぎ、跡片もなくなっていた。Oに、「亡くなったお前のお父さんも、お前に新しいお父さんができて、きっと喜んでいらっしゃるだろ」などと、本気で言えるまでになっていた。

Oは、男心に男が惚れるような関係が、父親と息子との間の最高の関係ではないかと考えながら、今日も朝早くから、あんこを仕込んでいる。

5. 「父親的なもの」

短大を出て5年目の主婦のY子は、以前ほどではないものの、今もなお、自分の父親に対して釈然としない気持ちを抱いている。その父、49歳。Y子、25歳。

Y子には、OL時代に恋愛、結婚した夫、Jと2歳になる息子Hくんと、生まれたてほやほやの娘Aちゃんがいる。

徐々に薄らいできているかなという自覚はあるものの、中高の頃は父親の声を聞くだけでも身震い起きることもあるほどだったという。

Y子が持ち出したのは、その父の自分のことは棚上げての妙な厳格さだった。

「棚上げ」されていた事柄のうちの最たるものは何だったかというと、Y子の父親には、愛人がいたという事実だった。その愛人に子どもまで生ませていたのだ。そのことを知ったのは、Y子が中学3年生の時だった。「こんなことがあってもいいのか。厳しいお父さんに、お母さん以外に女の人がいて、そこに自分たち姉妹（Y子には2つ違いの妹W子がいた）以外の男の子がいたなんて。何てことなんだ」。Y子の頭のなかは、真白になった。

Y子のその後の何ヵ月間かには、思い出したくないことがぎっしり詰まっている。多感で、おとなになりかけで、希望や不安が交錯する時代の只中にいた彼女にとって、この事

実を知ってしまったことは、あまりに重荷だった。

「できれば、そんなこと知りたくもなかった」と彼女は言う。そうだろう。少なくとも、知らなければ、Y子の父親への嫌悪感も、この件を知って以降のようなすさまじいものとはならなかったであろうから。

ただ、この件そのものに関しては、彼女は短大生になったころから、父親の心情に理解を示すようになってはいる。

「中学生や高校生のころは、もうあんな男は自分の父親なんかじゃない、話したくもないと思っていた。いいつもりで、肩なんかに両手を乗せられると、ゾクーっと頭のとっぺんから爪先まで悪寒が走って、思わず『止めてよっ』って叫んじゃったわ。

けがらわしい獣。人間じゃない。私たちを裏切って、どの面下げて都合いいときだけ家に帰ってきて、平然としていられるんだろうって思ってた。こんな気持ちの悪い家、出ちゃうかと思ったけど、そこまでの勇気は結局はなかった。

ただ、短大にはいったころから、あの件は、父親のせいばかりじゃないな、母親のせいもあるかもしれないって思えるようになったの。私の母親って、なんか理屈屋で、ひがみっぽくて、あんまり可愛げないんだもん。同性の私からみても、そう思えたんだから、まして男からみたら、つまらない女だったんじゃないかな。夫婦別室だったから、セックスもなかったみたいだし。

おまけに自分が、資産家の出なことを鼻にかけてるようなところが多分にあったから、今から冷静に考えると、父親が他所に女の人つくった気持ちもわからなくはない」。

婚外性交はいざ知らず、婚外子までもうけるとなると事は穏やかではない。子どもに対する社会的責任という点からしても、問題ありといわざるをえない。が、そんなふうな行動に走らざるをえなかった父親に対して、今のY子は同情的ですらあったのだ。けれども、嫌悪感も強く残っている。

そこには、彼女の母親の影があった。

Y子の父親は、異様なまでに厳格な人だった。やや大きめの都会Z市の中心街のオフィスに通う、サラリーマンだった。ただ彼の家もかなりの借家・借地を有する裕福な家で、かつては上級士族だったことが、普通とは少し異なる点だった。とはいえ、別は大富豪というほどでもない、まあ、近所ではちょっと目立つお金持といった程度だった。

そうした家の出であることを意識してか、Y子の父は、幼いころの彼女が「すみませんでした」と謝ったとあって怒った。「すみません」などというのは、卑しい身分の家でこそ通用するもので、我が家では、そんな謝り方はまかりならぬというのだ。

「申し訳ございませんでした」といえ、ということであり、せめて「ごめんなさいまし」といえ、ということだったのだ。

こうした言葉遣いはいうにおよばず、箸の上げ下げその他、諸々、立居振舞い全般、生活の細部に至るまで、父のY子に対する躰は厳格を極めた。けれども、その割には、父自身の生活態度は大変にルーズにみえた。その隔たりの大きさが、Y子の父親に対する嫌悪感の源泉だったのかもしれない。

そして、それを決定的にしたのが母親だった。Y子は、子ども心にも、父親と母親との仲が良くないことを知っていた。情無いことに、仲の悪い両親は、しょっちゅうY子の取り合いをしていた。

それは、あたかも3人の家庭で、自分を味方にしたほうが多数派を形成できるといわんばかりの多数派工作のようだった。妹のW子が生まれ、彼女がものごころつくようになると、両親による姉妹の取り込み合戦は熾烈を極めるようになる。

Y子も、W子までも、夫婦喧嘩に巻き込まれていった。Y子など、いつの間にやら必死に仲裁していることさえ何度もあった。幼いのか、思慮が足りないのか、両親は子ども達の面前でののしり合うこともしばしばだった。Y子は行き場を失ない、オロオロしながら、それ

でも懸命に「2人(姉妹)ともいい子になるから、もうやめて」などと懇願し、泣く泣く仲裁にこれ努めた。

両親が抑制が効かない分、Y子は自己抑制的になっていった。両親が我がままな分、Y子は自分を押さえるようになった。両親が自分たちの間のいがみ合いで喧嘩するのも、自分のせいと受け止めるようになった。

両親の仲違いで、家のなかが暗くなればなるほど、Y子は自分がいい子になって、この状況を何とかしなければ、と考えるようになっていた。

Y子の幼少女期は、自己抑制、自己抑圧の連続で成り立っていた。そんな折りしも折り、彼女が幼稚園の最年長組の春を迎えたばかりのころ、珍しく姉妹は母親に連れられて、Z市近郊では著名な桜の名所に花見にいった。

春霞のうららかな日で、もはやそんなに冷たくはない風に吹かれて散る桜の吹雪が姉妹の心を癒していた。堤防の草の上にシートを敷いて、3人並んですわって、おにぎりを頬張った。E川の川面に浮かんだ花びらがゆらゆらと流れていった。母親を真ん中にして腰かけた春のなかで、Y子は、そして多分、W子も、滅多に味わえない至福の時を貧っていた。

そんなとき、姉妹のどちらを見るでもなく、正面を見据えたまま、母親は尋ねた。

「Y子ちゃんやW子ちゃんは、お父さんとお母さんと、どっちが好き？」

明かった姉妹の場面は一挙に暗転した。久々に穏やかな春の日のなかに浸り切っていた姉妹の顔はこわばった。普段から仲の良い家族関係のなかで、冗談半分に親が子に聞くのとはわけが違う。

Y子は、W子を気遣ったが、姉妹の間には母親が座っているから、お互いに目を交わすこともかなわない。

沈黙を許さないような母親の雰囲気を押されたかのように、W子の声がした。

「W子、おかあさん」

Y子には、その声がひどく痛々しく聞こえた。Y子は、自らもまだ幼ないのに、幼ない妹

にまで、そんなむごいことを聞く母親を心底、憎んだ。父親も嫌いだ。が、母親はもっと嫌だ、と瞬間的に思った。その時、Y子の口からは、…

「Y子は、おとうさんのほうが好き」

という言葉がほとぼしりででていた。Y子のいたたまれないような気持などには全くお構いなく、母親は言葉を返してきた。

「あ、そう。Y子は、お父さんのほうが好きなのね」

と、いかにも非難めいた調子で。もう春のお花見の楽しい気分などどこかに吹き飛んでいった。Y子は、寒風吹きすさぶ荒野に1人とり残されたような寂しさを感じていた。

自ら、自分の身を守る術のない幼ない妹が、殆ど本能的に身の保全のために、そうして母親の歓心を買うために、「おかあさん」と答えていることが、Y子にはわかった。

その後、母親は、事有る毎に、

「どうせY子は、お父さんのほうが好きなんだもんね」

と、当てつけのように言うのだった。夫婦喧嘩の回数は増えるばかりだった。「どっちが好き？」事件以降、なんとなく、母親からうとまれているような気持に襲われていたY子は、その度び毎に、点数を挽回しようとして、必死になって、いい子を演じ、仲裁を試みた。

小さな女兒には、あまりにも重い役回りだった。けれども、Y子は、自分がきちんとすれば、自分が良い子になれば、何とかなると信じて疑わなかった。そう考え、そう行動するしか他に道はなかったのかもしれない。

いつしか、両親の仲が悪いのも、よく喧嘩するのも、自分がいけない子だからだ、とまで彼女は思い詰めるようになっていた。だから、一層、いい子にならなければ、いい子でいなければ、と自己抑制に努めるY子だった。

Y子が小学生になり、中学生になっても、家庭の状況にはあまり変わりがなかった。両親の喧嘩は断えず、父親は相変わらずY子に厳しかった。仕事人間の父の帰りは遅かった。時には仕事で忙しくて一とY子は思ってい

た一家に帰れないことも多くなってきた。

変化といえば、母親の父親に対する愚痴や悪口を聞かされる機会が増大したことくらいだろうか。娘にとって、母親から父親の悪口を聞かされるのは心地よいものではなかった。要領のいい妹のW子は、適当に相槌を打って、母親の受けを良くしていた。要領の悪いY子には、それは出来ない芸当だった。

時に、父親をかばったりして、母親から又ぞろ「どうせY子は」と嫌味たっぷりに言われ、傷つくのだった。

Y子にとって、父親は厳しくて、細かくて、そのくせ自身はルーズな嫌なタイプだったが、母親よりはまだましな人間だった。しかも、父は曲がりなりにも、時に帰宅もままならないほど懸命に働いて、家族の生活を支えてくれているという思いも、Y子には強くあった。その点だけをとっても、資産家の出であることを鼻にかけているだけで、口を開けば愚痴と人の（特に夫の）悪口ばかりの生活力も特技も、これといった資格もない母親よりは数段上等、と彼女は考えていた。

それだけに、中学3年生のとある夏の日、その父親に数年来、愛人がいたことを知った時の衝撃は小さくはなかった。いやらしい。不潔。あんなやつ、父親なんかじゃない。許せない。もう一生、口なんかきかない。

子どもには、仏頂面で厳しい顔をしながら、他方で自分は平気で不倫をしてたなんて、破廉恥きわまりない…激しい憤りが突きあげてきた。この件をY子が知ったきっかけも、両親の夫婦喧嘩だった。この両親は、誠にもって、救いようのない夫婦であり、救いようのない父母だったのかもしれない。

全くといっていいほど、子ども（たち）への配慮というものに欠ける両親だった。子ども（たち）を「我がもの」、自分の思い通りになるものと思い込んでいるふうだった。

子どもという他者の他者性の認識など、まるで持ち合わせていないかのような父母だった。

だからこそ、子ども（たち）が眼の前に居

ようが居まいが、そんなことには全くお構い無しに、自分たちの感情に任せて、些いなことで相手を痛罵したり、口汚くののしり合ったりするのだった。

常に、そういうことを平気で繰り返していたので、母親は夫の不倫に対する怒りをも平然と娘たちの前で爆発させてしまったのだ。多感な時期に差ししかかっている娘たちに、どんな影響を及ぼすかなどということは一顧だにされなかった。

ただ、その時には、娘たちは確かに「お母さん可哀そう」という気持ちをもった。同性としての哀れみのようなものを感じたのかもしれない、とY子はいう。

ともかく、その後、暫くの間、Y子の家は修羅場と化し、愁嘆場と化した。「地獄でもあれほどひどくはないと思うわ」と彼女は振り返る。「思い出したくもない」場面の数かずをも敢えてY子は思い起こしてくれた。

母親が、父親の愛人親子の家に怒鳴り込むのにY子は一再ならず付き合わされた。何ということに、子どもを巻き添えにする親だろうと思いつつ、Y子はここでも何か役割を果たさなければいけないような感情にも衝き動かされて、父の愛人親子があてがわれたマンションへ向かうのだった。

中3ともなれば、男女の性愛について関心もあれば、その内容もある程度は知っている。Y子はここが自分の父親の本当の愛の巣だったのかもしれないとも思った、と語る。

が、それはあくまで後年の感懐であろう。その当時のY子の内にあっては、やはりその愛の巣は、汚らわしい獣の許されざる行為の場という認識が勝っていたに違いない。

母が、その女をなじり、罵倒し、どうしてくれるのと叫ぶのも当然とY子は思っていた。潔癖な彼女には、父の行為は不潔きわまりないものに思えたからだ。Y子の体の中で父親に対する生理的嫌悪感がはっきりと増殖していった。

けれども、そうしたなかで、Y子は、母親が「私たちに幸せな家庭を返して。大事な夫を

返して。(Y子を指さしながら)この子の大切なお父さんを返してやっ」と、その女に哀願したときは、なぜか鼻白むような思いがしたという。

逆に、その女のほうが、Y子の家に直談判にやってきたことも数知れず。敵もさるもの、時に男の子を同伴していた。大人しそうな、しっとりとしたその女は、らしくなく、一別れる条件として「この子の将来を保証して欲しい」「子の養育費が欲しい」といったことを、はっきり主張していた。

親たちの不始末に巻き込まれた2人の女の子、1人の男の子、都合3人の子どもたちこそ、いい迷惑だった。犠牲者だった。

結局、幸か不幸か、Y子の父親の実家にある程度の経済力があったので、子どもの養育費としての一時金3500万円プラス現在その女が居住中のマンションの所有権の移転登記(Y子の父親名義を、その女の名義に)をすることで一件落着した。

一件落着とはいえ、その後、Y子の父親と母親との溝はより一層、深く広くなった。父親の愛人に対して嫉妬心を剥き出しにしていた母親だったが、自らも反省して、夫に思いやりをもって接しようという風でもなかった。被害者意識ばかりを募らせ、又ぞろ夫に罵言雑言を浴びせ、娘たちにその悪口を聞かせるばかりだった。

Y子は、もうすっかり父親も母親も嫌いになっていたろうに、それでも懸命にその気持を押さえていたようだった。それもこれも自分のせい、父母を嫌うなんてとんでもないという気持で、嫌悪感にすっかり蓋をしていた、というべきかもしれない。

ようやく中学を卒業したY子は、一刻も早く就職して家を出たいという願望を何とか抑制して高校へ進学した。そこで好きな英語に真剣に取り組んだ彼女は、又また「家を出る」ための就職願望を押さえて、Z市内のしにせのS女子短大英文科に推薦で入学を果たした。

あの一件の発覚までは、自分のことは棚に

上げて、Y子に厳しかった父親は一転、やけにものわりのよい、優しい親父に様変わりしていた。それがまた父の定見のなさを物語っているようにみえて、Y子は父親に元もと感じていた胡散臭さを増幅させていた。

おべっかも、照れも、かすかな反省の念も手伝ってであろう。父親の娘たちに対する対応には、気遣いすらみえるようになった。家庭内のみならず、世間における遊泳術に長けた妹のW子のほうは、そうした父親の気配りをもうまく活用して、それなりに器用に生きているようにみえた。W子は、「お母さん、可哀そう。私はいつもお母さんの味方よ」という感じで、いつまでたってもメリハリのない、自立できない母親にも取り入っていた。

父にも母にも不信感や嫌悪感を強く抱きながら、それを表出することは、良い子であることに反するから、したがっていけないことと、Y子は自らに言い聞かせ続けていた。だから、Y子は、W子のように闊達に日々を送ることはできないままに短大に進学したのだった。

ここで教養科目のひとつとして彼女は「心理学」を選択した。この、ごく細やかな学生生活における1コマが、実は彼女を大きく変えることになった。

S女子短大の「心理学」担当の中年男性のC教授は、かつてZ市の児童相談所に勤務していたことがあり、カウンセラーとして豊富な現場経験を有する人物だった。

それだけに、講義も、ただただアカデミズムの世界を歩んできただけの、青白い、世間知らずの学者さんの、現実離れした、抽象的な机上の空論の展開とは、ひと味もふた味も違っていた。

C教授は、職務上、知りえた数多くの子どもたちや大人たちの心の葛藤や悩みを、守秘義務に抵触しない範囲で、具体的に語り、彼らとともに悩み、考え、解決に導こうとした自らの軌跡を、誠実に語ってくれた。

Y子は目を見開いた。これまで、自分だけの悩み、自分だけの家庭のできごとと思ってい

たことが、実は、自分以外の多くの人びとも共通する悩みであり、家族のありようであることを知った。不思議なくらいに、気持ちが明るく、心が軽くなってきたことを、Y子は実感した。

教授が、アルコール依存症との関連で、米国では「アダルト・チルドレン」という概念が構築されていることを話してくれたとき、Y子はまさに自分もこの類だったのかもしれない、と即座に思い当った。

「もう、良い子でなければ、と常に自己を抑制するのはやめよう、お父さんやお母さんに対する嫌悪の情を露わにするのを押さえるのもやめよう、もう少し、自分の気持ちに正直になろう」。個人的に相談にいったY子に教授は、ゆったりと語ってくれた。

不覚にも、Y子は教授の前で涙をとめどなく流し続けた。こんなに泣きじゃくるのは、生まれて始めてだった。流れ続ける涙が心地良かった。これまで、両親の前で、涙を見せることができなかった自分、涙を見せることをためらっていた自分、涙を押さえようとしていた自分の境遇を思っ、さらに泣いた。

C教授は、自らの研究室に備え付けてあった手拭い兼雑巾のような布切れを、Y子に渡してくれた。その布切れで頬を伝う涙を拭いながら、Y子は生まれてこの方、現在に至るまでの自らのライフ・ヒストリーを語り続けた。

穏やかな語り口で教授は、Y子に悟した。

「よくわかったよ。君は、もうご両親のことで思いわずらう必要はない。お父さんとお母さんの間に立って、いい子を演じる必要もない。もう、むなしい過去を引きずって生きることはないよ。いつまでも過去を引きずっていると、未来が見えてこない。過去にこだわって、狭い自己中心的な人間になってしまう。過去にこだわりすぎていては、いつまでも未熟なままだ。

つらい過去から飛び出しなさい。君には素晴らしい感性があるようだから、それを磨きなさい。大人げないご両親の喧嘩やなんかにつき合う必要など、これっぽっちもないんだ

ぞ。家のことを憂えるのは君の役割じゃない。

これからは、学生生活を楽しみながら、ゆったりと生きていってごらん」。

知り合って間もないC教授に、Y子は「父親的なるもの」を感じた。信頼感、安らぎ、豊かな知性、自信、人生の年輪……。そうしたことどもを、彼女はC教授の醸し出す雰囲気の中に感じとった。Y子は、それこそ自分が実の父親に18年間、求めつづけて、遂に得られなかった「父親的なるもの」の意味内容ではなかったかと思った。

Y子の父親も躰は厳しかった。が、何か物足りなかった。が、その何かも、今わかったような気がした。その躰は、父が自分の家の体面、格式を墨守するための躰であって、必ずしもY子のためを思っているものではなかったのだ。

自分の本当の父親以外の男性に「父親的なるもの」を見出した彼女は、父のあの許し難い一件＝愛人問題・隠し子問題に関しては、許せるような気持ちになっていった。父も、ひとりの男、肉体的にも精神的にも自らの妻を愛することができず、悶々とするなかで、他の女に救いを求めていっただけのこと、そこで偶々、新しい生命が誕生しただけのこと、ただそれだけのことじゃないか、と思えるようになった。

そう思うと随分、気持ちが楽になった。C教授にいわれた通り、もう楽しくなかった過去に執着する必要はない、と思えた。

自分を常に「いい子」の殻のなかに閉じ籠めておくという強迫観念からも開放されていった。その分、父母に対する嫌悪感は昂じたが、他方では、父も母も可哀そうな人という気持ちも強まった。

父親という存在を通して自らの内に形成されてしまっていた男性不信も、氷解していった。どこか頑なで偏狭だった自らの性格（のようなもの）に大きな変化をもたらしてくれたC教授に対して、Y子は淡い恋情を感じ始めていた。

C教授とて、そうしたY子の眼差しに気付かな

いわけではなかったが、然り気なく陽気に彼女の想いを退けた。2人は、良い師弟ではあり続けた。

家でのY子は、以前よりずっとクールに父母に接することができるようになった。もはや父にも母にも多くのことは期待しなくなっていた。キャンパスやバイト先等、家庭外に有意義な居場所を見出すことができたY子は、無事S女子短大を卒業し、Z市内の名門企業O社に入社した。

そこは、父親の厳格な躰のお蔭で、若い娘にしては古風にして、丁寧すぎると思われるくらいにきちんとした言葉遣いのできるY子は、社で大変に重宝がられた。

男性不信からも開放され、潜在化していた「早く家を出たい」願望を顕在化させることに罪の意識を感じずに済むようになったY子は、はっきりと恋愛願望、結婚願望をもつようになった。

もともと色白で、少し憂いを含んだ大きな瞳のY子は、同僚の独身の男性たちの注目の的だった。そのうちの3人は、かなり積極的に接近してきた。そのなかで、一番、存在感があり、きちんとした人生観を持っていたJに、Y子は心惹かれていった。

求婚するJに対して、「生まれてくる子どもに、プラスの存在感を示せるお父さんになってくれますか」とY子は聞き返した。一瞬、怪訝そうな顔をしたJだったが、既にY子の生い立ちを知っていた彼はすぐに得心して、大きく頷いた。

Y子22歳、J27歳の春、2人は結婚した。Y子の父親の鼻向けの言葉は、「我われのような夫婦にだけはなるなよ。幸せになっておくれ」だった。あまりにも実感がこもっていて哀れだった。

程なく2人の間には、男の子が生まれた。純真で、Y子にベタ惚れのJは、「プラスの存在感のあるオヤジ」「オヤジ」とお題目のように繰り返しながら、愛息H君の育児に積極的に加担している。

2年後、今度は女の子が生まれた。Jは、な

ぜか今度は「プラスの存在感のあるパパ」「パパ」と唱えながら、帰宅するとすぐに風呂に入れて、Aちゃんをきれいに洗いまくっている。

男性不信に陥っていたY子が結婚できたのは、一にかかって「父親的なもの」を示してくれたC教授の存在のゆえだった。難のある「父子関係」を補完する意味で、こうした「父親的なもの」を有する第三者の存在の重要性は、今後、一層増していくものと思われる。

〔註〕

- (1)この私の唱える「ペルソナグラフィー」(personagraphy)について詳しくは、拙稿「現代史の方法と思想—民衆を主体とする歴史叙述・歴史研究のために—」(『東海女子大学紀要』第2号、1983年3月、23~38ページ)を参照されたい。さらに、その具体的な成果に関しては、拙著『ある「大正」の精神』(1982年、吉川弘文館)等を御覧いただきたい。
- (2)鶴見俊輔「その他の関係」(鶴見、徳永進、浜田普、春日キスヨ『いま家族とは』、1999年、岩波書店、9~27ページ(鶴見は、倉田亜季子「その他の関係」[『思想の科学』46号、85~91ページ<1990年>所載論文]に触発された)。
- (3)同上、14~15ページ。
- (4)同上、15ページ。
- (5)天沼香「『父親』・『父権』・『父性』の復権論の系譜—その批判的検討—」(『東海女子大学紀要』第18号、1999年3月)、16ページ。
- (6)「あったかサービス(家事介護)は地域の愛の助け合い」(「公社ニュースときめき」編集室編『公社ニュースときめき』134号、1999年10月15日号、足立区公社等連絡協議会発行)。

追記

2校の段階で、本稿の一部が2000年中に刊行される(と思われる)拙著のなかに取り入れられることが決定した。関係各位の御寛恕、御承認を乞い願う次第である。